

「山古志 復興新ビジョン」

第 2 回円卓会議 議事概要

1.日 時 平成 17 年 2 月 21 日 (月) 9 : 30 ~ 12 : 00

2.場 所 新潟東急イン 3F「八千代の間」

3.議事概要

(1) 委員長挨拶 (省略)

・新潟経済同友会 筆頭代表幹事 江村 隆三

(2) 分科会の報告

3 分科会における主な意見と対応 (事務局より資料 3 説明)

意見交換

(坂上ゲストスピーカー)

国道 291 号の復旧時期について 2 年を目標と記述されているが、一日も早く復旧したいと考えており、1 年を基本として復旧を予定している。ただし、トンネルなど大規模構造物はどうしてもそれより遅くなると考えている。

国道、県道、村道の 1 級、2 級は原形復旧を基本として考えている。

(伊藤総合アドバイザー)

今回の地震でこれだけ大規模な山崩れが起きているので、今年の夏季の降雨で崩壊と復旧を繰り返す可能性がある。その点を見据えておかななくてはならない。

(平井座長)

災害復旧は原形復旧が基本。現状では新たな被害の発生が予想される状況にあっても、原形復旧せざるを得ない。同じ場所で災害が繰り返されることがないように、再度災害の防止を強く意識した仕組みが必要ではないか。

(坂上ゲストスピーカー)

原形復旧が好ましくない場合は、ほかの方法を採ることも可能である。

(3) .復興新ビジョン中間報告 (素案) の検討

アンケート調査結果 概要 (速報)(事務局より資料 4 説明)(省略)

山古志復興新ビジョン (中間報告骨子案)(事務局より資料 5 説明)

意見交換

(平井座長)

NPO 法人山古志村(仮称)をつくって、長島村長が代表となって活動する形が、一番活力が出るのではないか。具体的な動きをリードしていく組織がカギとなる。

(西澤座長)

- ・村という行政組織がなくなるので、復興事業を進めていく組織が必要である。
- ・山古志ブランド形成のためには、「山古志」という名前を残すことが大事だと思う。
- ・「雪の活用・資源化」の項目の中で、昔、長岡市にあった積雪科学館のような雪の科学を学ぶ場を提案したい。

(和田座長)

- ・この復興新ビジョンが10年後の山古志をイメージできるもの、住民に元気を出してもらえるものにしていきたい。
- ・基盤再生分科会については雪が消えないと分からない部分が多い。農業用水や養鯉の水の確保ができるのかどうかを危惧している。
- ・雪を保存する技術は確立されつつあるが、運ぶことによりかなり費用がかかる。山地の傾斜を利用して、雪を効率的に集めることができないものかと考えている。

(木村アドバイザー)

今後、山古志と同じような中山間地で地震が起きた場合における孤立防止対策を、安全・安心の柱としてビジョンに明記するべきではないか。たとえば、道路ネットワーク、道路構造、陸路が寸断された場合の臨時ヘリポートの確保等が考えられる。

(平井座長)

あまり道路等のライフラインに頼らずに地域の自立性を強化することが、今後の中山間地域における防災の基本となるのではないか。電力の分散などライフ“ライン”からライフ“ゾーン”への転換という視点が必要で、通信の確保が特に重要になると考えている。

(伊藤総合アドバイザー)

今回の地震では、道路の寸断による物理的な孤立だけでなく通信の途絶による孤立も発生した。衛星を利用するなどして、少なくとも通信が確保されれば孤立という事態は避けられる。

(西澤座長)

山古志村の人たちは現金収入だけで生計を立てる気はなく、山のものがあれば生活できると考えているようである。産業による収入は副次的なものと考えた方がよいのではないか。

(江村委員長)

生活のスタイルがまちの人たちとは違うという点を書き込んではどうか。

(小田オブザーバー代理)

- ・「中山間地」は農政の用語であり、都会の人たちにとってはイメージしにくい。丁寧に説明する必要がある。また雪は厄介者というだけでなく、森や川を潤す貴重な水資源で

もあるということも記述することが大切である。

- ・介護保険制度が施行されてから初めての大規模災害であり、福祉の視点からも山古志の復興を考える必要がある。仮に中山間地の高齢者の多くが周辺都市に移住した場合、都市の財政は一気に逼迫してしまうため、周辺の中規模都市との共存・連携が必須となる。
- ・日本の原風景である中山間地のすぐ脇を、科学技術の粋である上越新幹線が通っているという特異な環境もアピールできるのではないか。
- ・新潟県は防災立県を標榜しており、それに先駆けて安全安心条例案の策定を進めている。

(伊藤総合アドバイザー)

- ・魚沼丘陵一帯は、地質的に言うと活褶曲でできた非常に特殊な地帯であり、日本で有数の地すべり地帯であるという認識が必要である。
- ・日本の国土の7割を占める中山間地は、活断層の活動、すなわち地震でできたものであり、今後もそのような地で地震災害が起きる可能性は高い。

(和田座長)

風評被害を防ぐために、ある時期に安全宣言をすることは可能なのか。

(伊藤総合アドバイザー)

噴火が収束した等の発表や行政的なイベントは行うが、科学者が安全宣言を出すことはないであろう。

(西澤座長)

防災施設だけでは観光客を呼ぶのは難しい。関係者が一致協力して周辺の観光振興にあたる必要がある。統合された観光データベースやマップ、PRなども必要ではないか。

(小田オブザーバー代理)

阪神大震災の被災地に活力を与えたのは観光であったと聞いている。中越地域の観光マップを作成してはどうか。

(伊藤総合アドバイザー)

復興ツーリズムコースの中に、震災当時の写真などを所蔵する記念館のような核となる拠点が必要ではないか。

(西澤座長)

できればその類の施設は山古志につくりたい。地元の産業振興に寄与する場所をつくることは大切なことではないか。

(伊藤総合アドバイザー)

同様の取り組みとしては、雲仙のフィールドミュージアム、有珠山のエコミュージアムがある。これらの事業は周辺自治体や住民が参加して進めており、事例として参考になる。拠点となるような施設を整備すると維持管理費が非常にかかる。地元自治体の負担が大きくなるので、財政の裏付けも視野に入れることが必要である。

(木村アドバイザー)

他のビジョンとの差別化を図ることが必要であり、産業再生・復興の部分は、このビジョンの中で非常に大事な部分になると思われる。

(和田座長)

地盤の弱いところに交通施設が集中して位置しており、今回の地震は中越地域の交通網

に弱点があることを示してくれたのではないか。インドネシアのある場所では、リスク分散の観点から道路と鉄道を離して整備しているが、国道 291 号に国道 17 号の迂回路としての機能を持たせることはできないか。

(伊藤総合アドバイザー)

地震が 3 ヶ月後に起きていたらどうなっていたか。積雪下で起きていたら、さらに被害が拡大していた可能性がある。

(坂上ゲストスピーカー)

長島村長は、これまでの支援に対する恩返しとして、防災の経験を発信したいと考えているようである。その仕組みを考えてはいかがか。

(平井座長)

今回の復興にあたっては、農地サイドの協力がどれだけ得られるか、いかに情報を共有できるが大切になるのではないか。

(西澤座長)

山古志村外の方に山古志村の観光や特産品を PR してもらう制度の導入を検討してはどうか。

(4) 今後のスケジュールについて

今後のスケジュールについて(事務局より資料 6 説明)

閉会

(文責：事務局山口)